

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

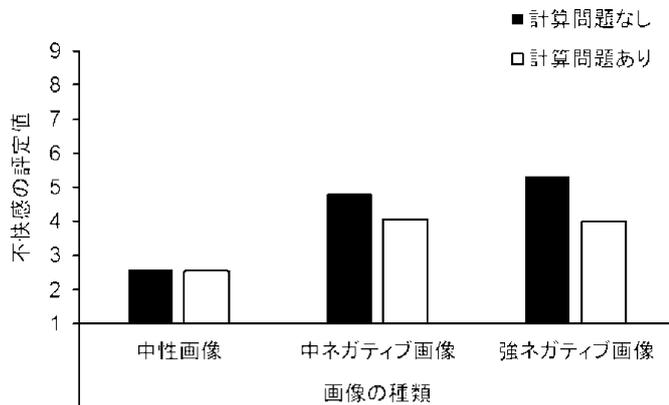
試験科目	人文科学研究科 心理学専攻	2026年度
専門科目	修士課程《一般》	秋季

【1】

《解答又は解答例》

- 問1 独立変数は、画像の種類（3水準：強ネガティブ画像，中ネガティブ画像，中性画像）と計算問題の要因（2水準：有，無）である。従属変数は、不快感の評定値である。
- 問2 画像の種類（3水準：強ネガティブ画像，中ネガティブ画像，中性画像）と計算問題の有無（2水準：有，無）の参加者内 2 要因分散分析（2 要因反復測定分散分析等の名称でも可）。
- 問3 中性画像は、画像によるネガティブ感情の誘発を確認するための統制条件として用いられた。これにより、計算問題による不快感の変化がネガティブ画像に特異的か、画像提示時の感情全般に生じるのかを検証できる。
- 問4 計算問題に対する正答率を算出し、正答率がほぼ 100%に近い高さであり、なおかつ画像条件間で差がないことを確認する。これにより、実験参加者が計算問題へ従事していたことを示し、計算課題が気晴らし方略として機能していたことを確認する。
- 問5 ネガティブ画像では、計算問題あり条件の方が計算問題なし条件よりも不快感が有意に低く、気晴らし方略がネガティブ感情を低減する可能性が示唆されている。一方、中性画像では計算問題の有無で不快感に有意な差はないことから、気晴らし方略の作用はネガティブ感情に特異的な作用をもつと考えられる。

問6



上記の図のように、2 要因の実験計画であることが分かるように適切に棒グラフを作成する。また、縦軸の数値目盛りとラベル、横軸に要因と各水準名、凡例として棒の種類（水準）が記載されている。

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 心理学専攻 修士課程《一般》	2026年度 秋季
専門科目		

《出題の意図》

- 問1 心理実験の要因計画を理解している。
問2 心理実験の要因計画を理解した上で、適切な統計手法を選択できる。
問3 心理実験における、実験条件間の適切な比較方法を理解している。
問4 心理実験における実験操作の妥当性の検証方法を理解している。
問5 心理実験におけるデータと統計結果を適切に読み取り、論理的に説明することができる。
問6 心理実験におけるデータから適切なグラフを作成し、図示することができる。

【2】

《解答又は解答例》

2-1. プロマックス回転

因子分析において、抽出された因子構造を解釈しやすくするために軸を回転させるという手順が行われる。この手順のうち各因子が直交し無相関になるように回転する手法を直交回転、因子間に相関があることを許容して回転する方法を斜交回転という。プロマックス回転は斜交回転のひとつで、因子負荷量の大小関係を極端化し、単純構造に近くなるように目標行列を定めるものである。心理尺度構成ではもっともよく使用される手法である。

2-2. 暗順応

暗順応とは、明るい場所から暗い場所に急に移動すると最初は何も見えないが、時間が経つにつれてだんだんと周囲の様子が見えるようになってくる現象である。この現象は、眼の視細胞には桿体と錐体という2種類の細胞があり、それぞれが機能する明るさのレベルが異なることに起因して生じる。暗順応は最初の10分で休息に進むが、その後暗順応が完了するまでには30～40分ほどの時間が必要とされている。

2-3. 対象の永続性

対象の永続性とは、物体は視界から消えても存在し続けるという理解のことで、心理学者ジャン・ピアジェの感覚運動期に獲得される重要な認知能力の一つである。生後8ヶ月から12ヶ月頃には、たとえば、おもちゃに布がかけられ見えなくなっても探す行動が見られれば、この能力が獲得されていることになる。この能力の発達は記憶や象徴機能の基盤となり、その後の言語発達やごっこ遊びにもつながると考えられる。

2-4. 自律神経系

自律神経系は、生体の恒常性を維持するため、循環・呼吸・消化・体温調節などを意識とは無関係に自律的に制御する神経系である。主に交感神経系と副交感神経系から構成され、交感神経系はストレスや行動要求の高い状況で心拍数や血圧を上昇させエネルギー動員を促す。一方、副交感神経

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 心理学専攻 修士課程《一般》	2026年度 秋季
専門科目		

系は休息・回復時に優位となり、心拍数の抑制や消化機能の促進と関わる。両者は拮抗的かつ協調的に作用し、生物の適応的行動の基盤を支える。

2-5. 認知行動療法

行動科学と認知科学を臨床の諸問題へ応用したものであり、認知と行動に対するアプローチを通じて、問題を自己改善するための方法である。問題解決のための治療目標を具体的に示して、その変容を目指す。複数の理論から生まれた多数の技法を包含した広範な治療法として発展している。認知行動療法では、問題や疾患に応じた治療プログラムが多く作られており、それらの多くで効果が実証されている。

2-6. 筋電図 (EMG)

筋電図は、筋線維膜に発生する活動電位に伴う細胞外電位の変化を電極で誘導し、時間的变化として記録したものである。骨格筋に直接電極を刺して測定する針電極法と、皮膚に電極を貼付して測定する表面電極法の2種類があり、神経・筋疾患の診断や、筋活動様式や運動制御の解析などに用いられる。また、筋収縮が強くなると、動員される運動単位の数や発火頻度が増加するため、それに伴って筋電図の振幅が大きくなる。

2-7. 正の強化と負の強化

行動の直後の環境変化によってその行動が将来自発されやすくなる現象や法則のことを強化と呼ぶ。環境変化が正の強化子（好子）の出現である場合を正の強化、負の強化子（嫌子）の消失である場合を負の強化という。これに対して、環境変化によって行動が自発されにくくなる現象や法則を弱体化（罰）と呼ぶ。環境変化が嫌悪刺激の出現である場合を正の罰、強化子の消失である場合を負の罰と呼ぶ。

2-8. (意味記憶のネットワークモデルにおける) 活性化拡散理論

意味記憶の主要な研究パラダイムの一つである、間接プライミング効果を説明するための理論。人の知識は、概念に対応するノードと、それらのノードを結びつけているリンクからなる、ネットワーク構造をしていると考える。ノードの活性化のレベルが高まると、処理効率が向上し、たとえば反応時間が短くなる。あるノードが活性化すると、リンク先の近接するノードを活性化するため、ネットワークの経路に沿って活性化が拡散する。

2-9. 帰納的推論

観察された具体的な事実や事例から、より一般的な結論や法則を導き出すプロセスのこと。例えば、「カラスは飛ぶ」「鳩は飛ぶ」などの個別の観察から「鳥は飛ぶ」という結論を導くこと。概念形成や言語学習などの際に用いられる基本的なメカニズムである。演繹的推論とは異なり、常に正しいとは限らない。収集した事例が少なかったり偏っていたりすると、誤った一般化につながる可能性

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 心理学専攻 修士課程《一般》	2026年度 秋季
専門科目		

がある。

2-10. カクテルパーティ現象

私たちは、パーティ会場のように大勢の人たちが談笑をして騒然としているといった場面でも、特定の人と話をしたり、聞いたりしてコミュニケーションができる。このように、特定の情報に選択的に注意を向け、他の情報を無視することができることをカクテルパーティ現象と呼ぶ。なお、注意を向けていなかった情報については、物理的・感覚的レベルまでしか処理がなされていない説と意味レベルまでなされているといった説がある。

《出題の意図》

心理学の複数の専門領域に関する基礎的な知識を持っていることを確認するための出題である。出題にあたっては心理学検定で公表されている用語から選出するようにし、領域や問題の難易度に偏りが生じないように配慮している。